
さくらびと

奈月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらびと

【Nコード】

N9401T

【作者名】

奈月

【あらすじ】

穏やかな、それでいて儚い笑みを零す人でした。「好きだ」と告げればはぐらかされて、「一緒に居たい」と泣けば真剣な顔で咎められた。それでも貴方は、私の命をかけてでも共に生きていきたいと願える人でした。（動物の心が理解る少女と他者の命を削ってしまふ青年の一週間の恋物語

）

序章

穏やかな、それでいて儂い笑みを零す人だった。

「ねえ、貴方はいつも、なにを見ているの」

椿がそう尋ねると、決まって彼は眉を八の字に下げる。そうしてその凪いだ瞳で、虚空を見上げるのだ。青と白で彩られた空はどこか物悲しい。椿がそう感じ始めたのは、目の前の彼があまりにも悲しげな瞳で、その色彩を眺めているのを、見留めてからだ。

「君は、僕がなにを見てるんだと思うの」

椿の問いに彼は決まってこう返した。分からないと言えば、そこでその話題は終了。「そっか」の一言で片付いてしまう。まるで乱雑な机の上の物を、バサバサと床に落としていくみたいに。

でも綺麗になる机の上の代わりに、椿の心には落下した本や筆記用具が、ドサドサと降り注いでくるのだ。だから椿は「分からない」でその話題に終止符を打たせないことをいつの間にか学んでいた。んーとねえ、と椿は視線をキョロキョロと巡らし、手始めにピッと指で青空を指し示した。

「あの空と雲。それから後ろの桜の木とか、そこに生えた草。あ、それか、丘の下の子い屋根の家とか、その家のベランダの花とか。えっと、あとは……」

椿は自分の位置から見えうる限りの物を次々と挙げ連ねていく。

だって何を見ているかなんて、椿には分からないから。下手な鉄砲も数撃ちや当たる。椿はどうだ、と言わんばかりの顔で、彼を見返してやった。すると彼は苦笑して、

「君はそんなに僕がキヨロキヨロしてたように見えたの」

と、少しおどけて、言った。

そうすると椿はぐうの音も出なくなるのだ。椿が分からなくてそう答えたのを見越しているのに、わざとそんなことを言ってくる彼は、時々意地悪だった。

「見えなかった」

椿にはそうやって返すしかない。彼はその反応を見て、楽しそうに笑った。

「でしょう？　——ああ、でも、ちゃんと正解もあったか……」

楽しそうな笑顔から一転、彼が寂しそうに目を細めた。その刹那、ああ、またやってしまった、と椿は直感する。

彼の色素の薄い髪がふわりと春風にさらわれ。彼の儚さがいつそう増し、まるで彼女の手の届かないところへ行ってしまうかのよう

で。

椿は慌てて彼に手を伸ばした。しかし、その手が届く前に、彼は自ら彼方へと足を進めてしまう。

「——目の前のあの草が、息耐えようとしてるからさ。……看取ってるんだ」

だって俺のせいだからね、と彼は苦しげに漏らした。椿は思わず

彼の目を覆ってしまいたくなった。現に、手は十センチくらい彼の方へと動いた。——でも、それ以上動かすことは出来なかった。

息耐えようとしてる草を見続けるのは、彼の覚悟の表れだ。あの草の今の状態が、彼によるものだということは変え難い事実で、それを看取するということは現状への、ひいては死んでいく草へ見せる覚悟だ。

それを止めることなど、椿に出来るわけもなかった。

ただ、遠ざかっていく彼を引き留めるために、椿は彼のシャツの袖を引いた。

「どうしたの」

彼の焦げ茶の瞳が椿に向く。椿は何も言わずに、彼のシャツの袖から伸びる手を取った。彼の目がぱちりと瞬く。椿はそれまでの空気を拡散するような笑顔を彼に向け、

「——お昼寝しようか、リヒト」

彼はもう一度ぱちりと瞬き、「いいよ」と苦笑して椿の頭を撫でた。椿は猫が飼い主に懐くように、ゴロゴロと彼に擦り寄る。と、彼は穏やかに微笑んだ。そこに、あの痛々しさは既になく。

「君はあたたかいね」

ぽふりと地べたに寝っ転がった椿の頬に、彼はやりわりと手を添えた。冷たいその手に自身の手をのせ、椿は瞳を閉じて、クスリと一笑する。

「リヒトは生ぬるいよね。もう少し私に優しくすれば、もっとあたたかくなれるよ?」

「…欲張りだよね、君は」

呆れたとばかりに彼は笑った。そのそよ風みたいな笑い声が、椿は好きだった。堪らなくなつて、彼の首の後ろに腕を回して、さらに擦り寄る。それを抱きとめ、やがて彼は小さく「考えておくよ」と呟いた。

椿は寝たふりして、彼の言葉に答えなかった。もつとも内心では「嘘つき。これ以上、私を踏みこますつもり、ないくせに」とタラタラと不満を垂れ流していたけど。

苦言を申し立てるだけ無駄なのは、既に知っている。物言えぬ椿の心は、今もシクリシクリと絶え間なく痛んでいた。

だから、せめて何も言わないけれど、存分に甘えてやろうと、首に回していた腕の力を強め、きゅうつと彼にしがみ付いた。すると彼は椿の艶々した黒髪を梳き、ポンポンと背中を叩いた。

ああ、慰められている、と椿の胸はさらにつまった。こういう瞬間に実感する。やはり、彼は生ぬるいのだ。その証拠に、彼は戯れに優しくしてみせるけれど、肝心なところでは捨て置く。彼の優しいところと薄情なところの狭間に立ち、椿の心は血を吹き出しながら、鈍い音を立てて痛み続けているのだ。

椿の目尻に涙が浮かんだ。苦しかった。苦しくてたまらなかった。でも、彼を関わるのを辞められない。椿は下唇をきつく噛み締め、涙を堪えようとした。それでも堪え切れなくて、涙を見られたくない椿は、彼の胸に顔を埋めた。

「——リヒト……」

掠れた声で椿が彼の名を呼ぶ。

そうして苦しげに小さく喘がれた、好きだよ、という言葉に、答える彼の声はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9401t/>

さくらびと

2011年10月8日17時22分発行